

覚えた。また赤松の白皮を煮て汁を捨て、食事の時残しておいたニシンを少し入れて塩味で食べたのも特別な思い出である。

寒さ

零下四十度以上になると作業もなくなり、そんな日には庭一面に毛布を広げて干すとシラミが凍死するという知恵もあった。

零下七十度も一、二回は経験した。そんな日にはまばたきと涙なみだずすりは止めてはいけない。まつ毛や鼻毛がすぐ凍るからだ。鼻の頭が白くなってさわるとペロリと皮がむけるので、細心の注意が必要であった。

私の幸運

将校は住居・食事・労働は別格扱いで優遇されていた。途中から将校全員が他のラーゲルに移された。それまで私は獣医官の当番をしていたので、いろんなおこぼれにあずかり、死者の多く出た最初の頃は助かったのであった。また、終わり頃はソ連の女医の当番みたいなおこぼれもさせられていて、それも元気で復員できたことこの理由の一つかもしれない。私のラーゲルは民

主運動も低調で、その苦勞もなかったと思う。最後にナホトカへ着くや腹痛で入院し、あきらめていると、間もなく病院船高砂丸が来て無事復員できたのであった。

考えてみると、他の方達より幸運に恵まれていたわけだったと思う。だが、そのことを喜んでいただけですまされない。死者のご冥福と世の平和を祈るのみである。

### 労苦懐かし

愛媛県 田坂 正

大正十二年八月十七日生まれ。昭和十八年前期徴集、第一乙種。飛行兵と国が勝手に決めた一体の戦闘ロボットである私は、戦争という畜生道へ向けて歩む。防諜のためとて、旗なく、幟なく、歓呼の声なく、送る者は、私が今出てきた会社の玄関にそれとなく佇む数人のみ。昭和十九年三月三十一日午前九時、満州国鞍山

市所在の満州電業株式会社南滿送電事務所經理課から、  
齊<sup>チ</sup>齊<sup>ハル</sup>爾第八航空通信連隊（一六六〇八部隊）への門  
出である。

敗戦により錦県飛行場に集結した將兵およそ二万人。  
昭和二十年十月六日、ダモイの夢を胸に、内部を上下  
二段に仕切って収容力を増やした有蓋貨車で、千五百  
人の將兵が旅立った。北上四十七日間、十一月二十一  
日黒河に着く。道中道草が多く、普通なら二泊三日の  
行程であろう。さらにアムール川の十分な凍結を待ち、  
十一月二十六日、糧秣のそりを引いて渡河、ブラゴエ  
シチュンスクからまた二段仕切りの貨車で出発。扉の  
掛け金を締められ、何故といぶかったが、スターリン  
の悪企みに思いも及ばぬ「敗戦初体験」の將兵であっ  
た。ダモイの夢破れ、皮肉にも開戦記念日の十二月八  
日に炭坑町レニンスク・クズネットキーに降り立つ。五  
〇三収容所といった。

二十一年二月雪中夜間作業中、左足凍傷で入院。戦  
後疲弊のソ連ながら、至れり尽くせりの介抱看護で、  
二人の女医も分け隔てない対応であった。一カ月ほど

で退院したが、後遺症のため、管内作業をしながら回  
復を待っていた。

七月中旬。結局病人として他の数人と共にレニンス  
クを発ち、沿線収容所の病人を併せてポシエツト湾に  
着く。不確実だが、一行三百人ほどだったろうか。既  
に私達のような人達の継続的通過があったらしく、美  
しい湾を一望するなだらかな丘に並ぶ空き幕舎で数日  
待機。ソ連の赤錆びた貨物船で北鮮の清津港へ。一夜  
野宿し、古茂山に至る。

約一カ月後、さらに興南に下る。約二千人くらい  
たかと思う。十二月末に全員帰還するが、それに先立  
つ十月上旬、不運にも私を含む百人ほどが再入ソ、ポ  
シエツト湾沿岸のクラスキーノ付近の山中でさらに二  
冬、冬將軍と対決することになる。ウオロシロフ五六  
二労働大隊分遣隊と言ひ、仕事は伐採である。二百人  
ほどの先住者がいて、彼等から「懲罰大隊」だと聞か  
される。仮借ない厳しいノルマで、給与も悪く、成績  
の悪い私のグループはよく飯を減らされた。幸い翌二  
十二年夏には四級となり、バーニア勤めを三カ月ほど。

一息つけた。

元来危険な仕事、何人かの犠牲者が出たが、彼等は特にハラシヨラボータであり、気の毒であった。その中の一人は私の故郷近接の町の方で、後日、私のご遺髪を県世話課に届け、ご遺族のもとに帰られた。

殺伐たる山仕事にも虜囚の身を忘れるようなひとときもある。馬力搬出は馬と一体だが、朝当てがわれて、夕方ブラッシングをして返納だから、大して厄介ではなく、馴らされたおとなしい駄馬との交流の日々である。空腹のあまり、昼休みに与える馬糧の燕麦をピンはねして、焚き火で焦がして手で揉み皮を取り、もさもさと頂戴した。(馬さん、ごめんな)

冬の雪上のそり搬出は、そりにしっかりと固定した木材の尻に取りつき、体を預けて坂道を滑る。足で雪面を蹴って方向を変える。雪上スクーターかポップスレーの気分である。神経は使うが遊び心をくすぐられる。

夏の山は山菜、野草の宝庫、はなはだまずいが腹の足しにはなる雑草も含め、露命を繋ぐ大切な助っ人であった。

昭和二十三年、三度目の遅い春が訪れる頃、私は「もう駄目か」と自覚する程に消耗し、就寝したまま翌朝起きて来なかった何人かを思い出していた。折しもメーデー休日、一日中寝ていたいところだが、オルグの目もあり、仲間の出し物を戸外の切り株に寄り、朦朧としながら見物したが、中でも樽太鼓の八木節は出色の出来で、印象鮮明である。

好運の女神未だ我を見捨て給わず。五月五日に身体検査、例の尻肉つまみで、五十人ほどとともに選別され、別棟で待機して二日目に移動命令。今までダモイ、ダモイで騙され続けたが、今回は「ダ」の字も出なかった。直ちに隊長選挙で私を選ばれ、慌ただしく主計、炊事係を指名し、大急ぎで糧秣を受領、即刻トラックで出発。感傷に浸る暇などない。時に五月七日午後。その夜は下山した野原で野宿。翌八日朝、何と乗り込んだ列車はバーニア車のついた寝台列車。早速シャワーを浴びて夢のような旅で、九日朝ナホトカ着、やっとダモイを確信。幸運にも即日乗船して一泊。十日出航、信洋丸はひた走る。十二日舞鶴上陸。五月十九日、焼

け野原の故郷松山へ。心神耗弱状態で、帰郷の感慨はいたって薄い。

半世紀も経つと労苦も苦汁も懐かしさのペールに包まれるが、そうでなくとも、抑留中に接し見聞した軍人、一般人ともに、素朴な親しみやすい人達だった。

我が軍隊の狂信、加虐性と比較すれば、この目で見たソ連軍はむしろ民主的でした。この点は大方の抑留者も認めると思う。彼等が俘虜を「こき使う時どなった」とされる歴史的代表格の言葉「ダワイ、ダワイ、ヴィストラ！」は、監視兵としては、その義務を全うするための当然の掛け声であろう。逆に日本兵ならどう言動したか、想像に難くないと思う。ソ連軍人や監督が我々に暴力を振るったことも、軽蔑したこともない。独裁者を除いて一般国民は、俘虜に公平、親切であった。私なりに一言で抑留を総括すれば、「(当時の)ソ連社会機構への疑問」「得がたい極限体験」「人間愛の発見」「人間万事塞翁が馬」ということになろうか。なお、日付、数字は私の記憶と独断である。誤りあれば読者のご教示を乞う。

## 敗戦の苦しみ

熊本県 小佐井 善次

敗戦の引き金となった昭和二十年八月九日、一方的に不可侵条約を破りソ満国境を突破しソ連軍の猛攻撃が展開された。全満州の制空権を握り機甲軍団が怒濤の如く進撃、満州における重要基地は殆ど玉砕したの情報あり。当時私は外務省関東局に在勤中の出来事で、事實は事実として後世のために伝える事が抑留体験者の使命であると思うので、当時を思い出し、多くの証言者の方々を思い出し語ろうと思う。

八月十五日日本は無条件降伏、陛下の玉音放送である。国民は耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍べとのお言葉であった。それから光陰矢の如く五十数年の歳月が流れ、平和日本として世界最大の経済大国となり、敗戦時の満州における悲劇の有様、またシベリアへの強制抑留、飢餓と酷寒と苛酷な重労働で多くの日